

震災の悲しみ普遍的に

「春をかさねて」(佐藤そのみ)

東日本大震災の津波で石巻市大川小6年だった妹を亡くした遺族の手による劇映画だ。被災した子どもたちの心の傷と友情を描いた。監督の佐藤そのみ(24)は、自らの体験を基にした虚構の物語を通じて、震災の悲しみをより普遍的に表現した。

英語で言う「アート」とは本来、人間が生きるために全ての「術」を指す。つらい記憶に向かい、これから的人生を生きる手立てとして創作された本作は、眞のアートと言える。

妹を亡くした14歳の少女祐未は「妹のため経験を伝えなければ」と義務感に駆られ、訪れる記者たちの取材に応じる。同じく妹を失った同級生れいは、ボランティアの学生に恋心を抱く。そんなれいに祐未は思わず嫌みを言うが、れいも

心の奥で深く傷ついていた。

「あなたの瞳」にも登場するが、大川小の校庭に

場するが、大川小の校庭には、生者のジョバンニと死夜」をイメージして児童たちが描いた絵画が残る。賢治の「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という言葉が刻まれている。

銀河鉄道に乗り込むのは、生者のジョバンニと死夜」をイメージして児童たちは、生き残ったのに向かうカムバネルラだ。「自分はなぜ生き残ったのか」「自分は生きていてよいのか」。震災で命をつなぎだ子どもたちは、賢治の言葉を映すような問いにさらされ、深く苦悩してきたはずだ。

佐藤が取材に対し、「ずっと取材され描かれてきたが、描かれるだけでなく、描きたかった」と述べたことでも深い感慨を覚えた。遺族自らが言葉をつむぎ、創作に仕上げた歩みは、震災10年が生み出した一つの果実だろう。

映画は、悲しみを抱える人々が犠牲者と対話する「銀河鉄道」になり得る。賢治が愛したイーハトーポーの海岸から北上川を下れば大川地区に行き着く。銀幕に映ったヨシ原が美しい。本作は、地域の人々を癒やす大河の一滴になる。



「春をかさねて」の一場面(佐藤監督提供)

(敬称略)
（生活文化部・会田正宣）
＝3月21日、石巻市・旧観慶丸商店